

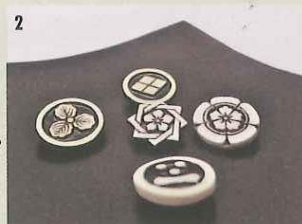
伝統力 亀谷窯業 島根県浜田市

伝統瓦の新展開で 世界に進出！

200年以上の歴史を誇る石州瓦の老舗、亀谷窯業。瓦需要が減少する中、独自商品の「本来待瓦」で、トイレや器などを作るといった新たな展開を試みている。



1 飲食店とのコラボで生まれた瓦で焼く「瓦そば」。耐熱瓦は独自の製法で開発したもので直火にかけても割れない特徴をもつ。2 瓦製の家紋ブローチ。3 わさびを摺りおろす器。4 シャトル窯。亀谷窯業では瓦の堅牢性にこだわり、1350℃で22時間以上焼く。



6 (文化3) 年創業の老舗、亀谷窯業。9代目社長の亀谷典生さん(46歳)だ。亀谷さんは岡山県生まれで、製薬会社に勤務

も生まれています。その先陣に立つのが、180

人口約5万6000人で日本海に面した浜田市は、人と文化と自然の調和が取れた県西部の中核都市だ。農業、漁業ともに盛んだが、特に有名なのが石州瓦。三州瓦、淡路瓦と並ぶ日本三大瓦産地の一つで、独特の赤褐色で知られる。

後、36歳の時に妻の実家である亀谷窯業を継いだ。「うちの瓦は本来待瓦(ほんきましがわら)といって、石州瓦の中でも特に丈夫で硬いもの。酸やアルカリに強く、塩害、凍害も受けません」

本来待瓦は来待石という釉薬を使い、1350℃の高温で22時間以上火を入れるのが特徴。通常の瓦は1200℃ぐらいで焼くというから、かなりの高温だ。また、大量生産方式は取っていない。オーダーに応じて1枚からでも作るのが売りだ。

「とうとう、どうすれば若い人たちに石州瓦の魅力を伝えられるかについて考えました。悩んだ末に、まず作ったのが壁に張ったり床に敷いたりするタイル。次に、自然豊かで食べ物もおいしい浜田市の飲食店とのコラボレーションを始めました。たとえば、瓦製の器を使ってもろったり、瓦の上で焼く『瓦そば』という新メニューを考案したりなどの試みです」



高知のレザースタジオ「森川の舎」。本来待の屋根瓦を製作。初の試みとして、5色の濃淡を付けて昔の登り窯の雰囲気を出した。

「とうとう、どうすれば若い人たちに石州瓦の魅力を伝えられるかについて考えました。悩んだ末に、まず作ったのが壁に張ったり床に敷いたりするタイル。次に、自然豊かで食べ物もおいしい浜田市の飲食店とのコラボレーションを始めました。たとえば、瓦製の器を使ってもろったり、瓦の上で焼く『瓦そば』という新メニューを考案したりなどの試みです」

また、経産省が主催するJAPANブランドプロデュース支援事業「MORE THAN プロジェクト」は今年で3年目を迎えるが、亀谷窯業は2016年度の12プログラムの一つに選ばれた。これまでに培ってきた耐熱瓦の製作技術を生かし、ア

メリカとオーストラリアのバーベキュー文化に新しい風を巻き起こすもくろみだ。いわば、全世界の器市場に乗り込むわけだが、亀谷さんは「はいえ、うちは陶器屋じゃなくて瓦屋だ」と語る。



石見地域の家々の屋根を飾る石州瓦の赤色が独特の風景を作り出している。



粘土場の亀谷社長。

あくまでも、瓦をイメージした商品をどこまで追求するという姿勢は変わらない。(石原たまき)

取材協力・写真提供：亀谷窯業 <http://user.iwamicatv.jp/honkimachi/>
石州瓦工業組合 <http://www.sekisyu-kawara.jp/>

